

名古屋市の被害

名古屋市域の震度は現在の6～7相当だったと推定されています。また液状化現象も各地で発生しており、当時の様子を伝える以下のような記述が残っています。

織豊村(※現中村区)では池水溝渠等の水は泥水変じて増水、鳴海町では井水が1～2 m以上も増水またはあふれ出し、赤土濁となったが、3日後に半減、1週間で復元した。岩塚村(※現中村区)の一井戸は微温湯となり翌日冷却した。柳森村(※現中村区)地内の井水は悪臭を伴ったという報告がある。下ノ一色村(※現中川区)井水悉く泥水、砂水を噴き上げ砂泥1.5 m くらいの噴出の個所多く、また亀裂は長さ約200 m、巾約1.8 m、深さ1.5 m ほどのものができた。

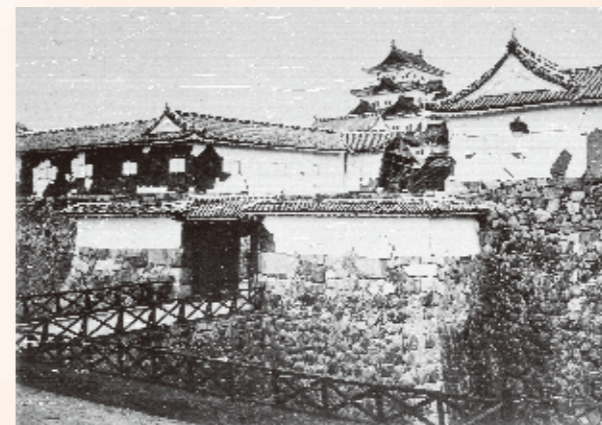
名古屋市では城西(※現西区)長堤で6～7箇所泥砂噴出、巾下(※現西区)上宿辺で亀裂・噴砂水あり、砂水4.5 m 以上も噴出し一時は猛烈であったという。また堀川は増水した。溜池の破堤が各村で見られた中でも田代村(※現千種区)の猫ヶ洞(※周囲約2.5 km の大溜池)の堤防が崩壊して、一時人家耕地数10haに浸水し田代村では人家一むねが流出した。

飯田汲事 編『濃尾地震文献目録』愛知県防災会議地震部会、1978 p.105 より引用
※部分は作成時に追加

< 名古屋市の被害状況 >

人的被害	死者	190人
	負傷者	499人
住宅被害	全壊	1261棟
	半壊	1603棟
	破損	3135棟
非住家被害	全壊	848棟
	半壊	803棟
	破損	959棟

出典：名古屋市における既往の地震とその災害



濃尾地震後の名古屋城

石垣や土塀が一部崩壊している

写真出典：岐阜地方気象台

名古屋市の土地は「沖積層」と言って、比較的時期の新しい、弱い地盤の上に広がっているんだる～。

